

一般演題抄録

I—2 当科における関節リウマチに合併した医原性免疫不全関連リンパ増殖性疾患の解析

○小笠原 公平¹ 高畑 武功¹ 立田 卓登¹ 鎌田 耕輔¹
 蓮井 桂介¹ 平賀 寛人¹ 櫻庭 裕丈¹ 山形 和史²
 玉井 佳子³ 福田 眞作¹

(弘前大学大学院医学研究科 消化器血液内科学講座¹⁾ 同 保健学研究科 生体検査科学領域²⁾ 同 医学研究科 輸血・再生医学講座³⁾)

【背景】その他の医原性免疫不全関連リンパ増殖性疾患 (OIIA-LPD) は臓器移植以外で使用された免疫抑制剤の投与中に発生するリンパ増殖性疾患である。薬剤性の他に自己免疫疾患、加齢、EB virus 感染など様々な発症要因が考えられているが詳細はまだ不明のことが多い。OIIA-LPD の代表的なものとして、関節リウマチ患者 (RA) におけるメトトレキサート投与例が挙げられるが、メトトレキサート以外の免疫抑制剤でも LPD の報告がされている。本研究は当院で治療介入した RA 患者における OIIA-LPD の背景や臨床経過から後方視的に臨床的因子と治療効果の関連について検討した。

【方法】2011 年 4 月から 2020 年 7 月までに OIIA-LPD の診断で当院を受診した RA 患者 27 症例を対象とした。背景は男性 8 人、女性 19 人、年齢は 29-83 歳 (中央値 67 歳)、組織型は DLBCL 12 例、HL 6 例、FL 1 例、SLL 1 例などであった。まず全患者を対象に各臨床的因子別に Logrank 検定および Cox 比例ハザードモデルを用いて単変量解析を行い、どの因子が予後に影響を与えるかを検討した。また、免疫抑制剤休薬のみの経過観察可能群と何らかの治療を必要とした群で、臨床的因子の違いについて Fisher の正確検定を用いて検討した。

【結果】Logrank 検定では PS、臨床病期、B 症状の有無、LDH 値、CRP 値において、全生存期間に有意な差が見られた。Cox 比例バザードモデルでの単変量解析の結果では、PS 不良、B 症状あり、LDH 高値、CRP 高値であることで、全生存期間において有意な予後の悪化が見られた。また、自然軽快した 6 例と何らかの治療を行った 21 例で背景因子を比較したところ、両者で違いがあったのは CRP 高値のみであり、CRP 高値の患者では免疫抑制剤休薬のみでの経過観察は困難となる可能性が高いことが示唆された。

【結語】当院における RA 患者の OIIA-LPD は PS 不良、B 症状あり、LDH 高値、CRP 高値の場合予後不良であることが示唆された。また CRP 高値の場合はいずれ化学療法が必要になる可能性が高いことも示唆された。ただし本研究は単施設の小数例による検討であり、各種バイアスや交絡因子もあるため、前向き多施設共同での研究が必要であると考えられる。